



只見町ブナセンターだより

暦の上では春分が過ぎ、日ごとに昼の時間が長くなってまいりました。只見町ではこの時期になると昼間に解けた雪が朝の冷え込みで凍り固雪渡りが楽しめます。今年は暖冬のせいで普段いけない場所にいける固雪渡りが楽しめる時期が短そうなのが残念でなりません。今年度も終わりが近づいてまいりました。今年度の様々な講座や観察会にご参加いただきありがとうございました。来年度も皆様のお越しをお待ちしております。

開催中【企画展】



春植物の生活史

—つかの間の季節を生きる色とりどりの花たち—

期間 2016年3月12日(土)~6月13日(月)

只見町の長い冬が終わり春を迎えると、木々の芽吹きに先だってカタクリやフクジュソウなどの春植物たちが景色を彩ります。私たちに春の訪れを告げる春植物の生活史を紹介します。

ご案内【春の自然観察会】

毎年、多くの方に参加していただき、好評の春の自然観察会を今年も開催いたします。雪解けとともに一斉に春の花が咲くのが只見町の特徴です。また、残雪と新緑が見えるブナ林も只見町の春の楽しみの1つです。この冬は例年よりも雪が少なかったのですが、どのような景色が見られるのでしょうか。皆さまの参加をお待ちしています。

春の花観察会

定員 30名

日時：2016年4月30日(土) 13:00~15:00

集合：只見町ブナセンター12:45

観察地：黒谷川沿い ※開花状況によって観察地を変更します

持ち物：飲み物、雨具、長靴が好ましい

参加費：1000円(保険料を含む)

春のブナ林観察会

定員 30 名

日時：2016 年 5 月 1 日（日）10：00～14：00

集合：森林の分校ふざわ 9：30

森林の分校ふざわ 只見町布沢大久保 544 TEL. 0241-71-9511

観察地：癒しの森

持ち物：昼食、飲み物、雨具、長靴が好ましい

参加費：1000 円（保険料を含む）

※いずれの観察会も事前の予約が必要です。締め切りは：4 月 29 日

※悪天時は中止することがあります。

※観察会参加者は 4 月 30 日・5 月 1 日にブナセンターを見学できます。

申込・お問い合わせ 只見町ブナセンター 0241-72-8355

===== 活 動 報 告 =====

【料理教室】2015 年 11 月 23 日(月・祝日)

「只見町の食材を食べる」

平出美穂子氏は、会津地方をはじめとした福島県の伝統食文化について研究されている郷土料理研究家です。平成 24 年から毎年、料理教室を担当していただいています。今回は、只見町の食材を使うことをテーマに料理教室を開催しました。塩干しワラビは、春に収穫し塩漬けにしたワラビを干した只見町で伝統的な保存食です。塩干しワラビを使って山菜強飯、八杯汁、残雪を作りました。残雪は、ワラビの上に山芋をかけたもので、その見た目は只見の雪解け風景を想像させます。もうひとつの食材は、蕎麦粉で、蕎麦粕寒天と兵



▲料理の説明をする平出氏

糧丸を作りました。最後は、旬の青菜を使った胡桃和えです。料理に使う野菜は、参加者のおひとりをお願いして、只見町で作られたものを持ってきていただきました。初めに、平出氏が事前に作って持ってきてくださった献立の見本を見ながら、料理の説明をしていただきました。その後、それぞれの調理に取り掛かりました。



▲自分たちで作った料理を食べる参加者

参加者は、町民を中心に8名で、普段から料理に慣れている方が多く、てきぱきと作業を進めていきました。しかし、中心食材だった塩干しワラビの戻しが上手いかず、結局、平出先生が事前に戻して持参してくださったワラビを使うことになりました。試食会では、参加者ひとりひとりが自己紹介をしながら、料理の感想や自分のレシピなどを紹介しました。平出氏の娘さんやお孫さんも参加して、和やかな雰囲気ですべて料理教室を行うことができました。

【座談会】2015年12月5日(土) 「只見町の昔を聞く」

企画展「昔の写真からみた只見町」に写真を貸していただいた方々の中から、菅家誠也さん(只見)、飯塚恒夫さん(坂田)、星文孝さん(黒谷)の3名を話し手としてお招きし、座談会形式で只見町の昔の様子について写真を見ながらお話していただきました。

まず、菅家誠也さんには、明治から昭和初期まで只見町で養蚕の組合を行っていた南光社についてお話いただきました。明治時代に曾祖父が南光社を立ち上げたときの苦労話や養蚕が盛んだった頃の様子を、当時の写真や南光社で使われていた生糸出荷用のラベルを見ながら説明していただきました。参加した方々は、従業員のために1日4斗(約60kg)の米を炊いていたことや水車小屋で機械を動かしていたことなど、当時の様子に大変驚かされていました。

飯塚恒夫さんには、只見町における養蚕の発展についてお話していただきました。只見町の自然環境に合った蚕や桑を探した話や八十里越の峠道にあった小屋の写真などを通して、昔の只見町の様子を紹介していただきました。最後に、星文孝さんからは、これまで



▲賑やかな座談会の様子

使われていた様々なカメラの紹介を通して、只見町における写真の変化についてお話していただきました。さらに、これまで撮ってきた写真の紹介やこれから撮りたい写真についても話され、今後は風景だけではなく只見町に住む人々の生活を記録した写真を撮りたいとおっしゃっていました。参加者からは、南光社の取引の状況や今回紹介した写真などについての質問や参加者自身が体験した養蚕の話が出ました。

【ブナセンター講座】 2015 年 12 月 19 日(日)

「自然の恵みの活かし方-今までもユネスコエコパーク登録後も-」

松田裕之氏は、横浜国立大学大学院教授で、数理モデルを使った生態リスク学を専門とする研究者であり、日本 MAB 計画委員会委員長でもあります。日本 MAB 計画委員会 は、ユネスコエコパークへの登録を目指す地方自治体に対して、申請に向けてのアドバイスを行っている団体です。

始めにユネスコや MAB 計画の理念と考え方についてお話しいただきました。MAB (Man and the Biosphere の略) 計画は、人類と環境の間の問題解決を目的としたユネスコが推進する政府間共同事業です。ユネスコエコパークは、この MAB 計画を実践する場として位置づけられています。ユネスコ事業の核となる理念は「人を育てる」ことにあるそうです。自ら自然を守り、地域の暮らしに生かしていく人を育てることが大切だと松田氏は強調されました。

そして、他国のユネスコエコパークの事例をご紹介いただき、その中から見えてくる只見ユネスコエコパークの特徴をご説明くださいました。ひとつは、組織と管理体制が整っている点、もうひとつは調査研究が実行されている点だということでした。ユネスコは、ユネスコエコパーク（海外では BR : Biosphere Reserve 生物圏保存地域と呼ばれています）登録地間の交流を重視しています。2013 年に只見町において第 1 回日本ユネスコエコパークネットワーク会合が開かれましたが、このような国内ネットワーク会議を行っている国は日本だけという事です。それが、只見町で行われたことにとっても感謝しているとおっしゃっていただきました。ユネスコエコパークに登録されたことで築かれるネットワーク、例えば、他の登録地との交流や、科学者、企業、都市域などとのつ

ながりを使いこなすことは、登録地の地域活性化を進めるカギとなるとの提言をいただきました。

本講座には、29 名の方に参加いただき、只見ユネスコエコパークについて改めて考える機会となりました。



▲聴講者からの質問に答える松田氏

【只見町公認自然ガイド特別育成セミナー】2016年1月30日(日)

「日本における里山管理の歴史」

湯本氏は、国内外で精力的に動物と植物の相互関係を研究されてきました。そしていま、130人の大プロジェクトチームをまとめ、日本列島の3万5千年の歴史における人と自然との関わりを紐解いておられ、その成果をお話ししてくださいました。

日本列島は世界的に見ても生物多様性の非常に高い地域の一つです。温暖湿潤であることと、南北に長いことと、海から山頂までの標高のバリエーションがあることで生物多様性が維持されています。氷河期に、完全に氷河に覆われず、生き物が隠れ住む場所があったことや、人が「賢明な利用」をしてきたことも重要です。

しかし、花粉分析の結果や古文書の記録など様々な資料を集めて付き合わせていくことで意外な事実がわかってきました。平安京が作られたような古い時代から、山を過剰に利用し続け、いたるところ禿山であったようです。私たちが思いうかべる田畑が広がり、雑木林が奥にひかえる里山のイメージは燃料革命以降に木材利用が減少した後の比較的新しくできたものだということを知った時には驚きました。

一方で、貴重な水源地の周囲には御神木があり、それを保護することで人々は水源地を大切に守ってきました。また、森を切り尽くさずに、萌芽再生を利用することで持続的に薪を得る知恵を伝えている地区もありました。昔から利用している人はこれ以上採ってはいけないという自己規制の気持ちを無意識に持っていたのかもしれない。

先進国で、古くから繰り返し人の利用があるのに生物多様性が高いことは、希少なことです。他方で発展途上国が多くを保有する生物多様性の高い熱帯林は多く伐採されています。このことは機会費用（一番利益が上がる手段を選んだ時と選ばなかった時の差額）が伐採と持続可能な利用とには大きな差があるために生じてしまいます。森林を残



▲講師を務められた湯本氏

し利用することでいかに利益を上げるかを考えることの必要性を感じました。

また、今まで通りの山や里の利用の歴史を振り返ることで、今後の利用方法を考える機会となりました。

今回の講座は只見町公認自然ガイド育成講座の一環として行われました。

【平成 27 年度「自然首都・只見」学術調査助成事業】2016 年 1 月 31 日(日)

「研究成果発表会」

只見町が研究助成事業をはじめて 4 年目となり、その成果発表会も 4 回目を迎えました。今年は 7 組の研究グループが、只見町で行った精力的な調査研究の成果を発表しました。昨年度までは動物・植物などの自然を扱ったテーマだけでしたが、本年はこれらに加えて、国内ユネスコエコパーク 3 ヶ所（只見、屋久島、綾）の登録に至るまでの経緯や現状についての比較研究（戸田恵美氏・放送大）といった社会学的な研究発表もありました。

また、古民家を対象とした人による天然資源利用の研究が報告されました（井田秀行氏・信州大）。只見町の古民家 3 軒は何の木で作られているのかが明らかになりました。屋根を支える扱首（さす）はキタゴヨウやブナ、柱にはキタゴヨウやケヤキ、土台には腐りにくいクリなど、只見町で身近に生えている樹木が使われていました。井田氏は他の多雪地でも同じような調査をされていますが、キタゴヨウがこれほど使われている例はなかったそうです。

自然を扱うテーマではフクジュソウについての研究（近藤菜々美氏・横浜国大）がありました。黄色でパラボラアンテナの様な形の花が特徴的なフクジュソウですが、大きな花ほどたくさんの雄しべや胚珠をつけるだけでなく、大きな花ほど花内部の温度が高くなり、花粉を運ぶ昆虫にとって活動しやすいことなどが発表されました。

2014 年に新種記載されたタダミハコネサンショウウオについての発表では、只見川左岸だけでこれまで確認されていましたが、新たに右岸の生息地での発見が報告されました。そして、遺伝子の解析からタダミハコネサンショウウオはハコネサンショウウオよりも古くから只見地域に生息していた可能性が示されました（吉川夏彦氏・科博）。私たちに馴染み深いユキツバキに関しては、ヤブツバキとは花の形や色のほか、葉の表面の細胞層の厚さや遺伝子、花粉媒介者が大きく異なっており、別種である可能性が強いことが発表されました（三浦弘毅氏・新潟大）。ほかに、雪折れや伐採跡から萌芽してできたブナの木の樹洞に生息する土壤動物に関する研究（吉田智弘

氏・農工大）やユビソヤナギの阿賀野川水系における自生状況に関する研究の発表がありました（菊地賢氏・希少種保全研究会）。

当日は、発表者 7 組 10 名と聴講者 34 名、関係者 9 名が参加しました。発表者のみなさんが、自分の研究対象について熱く語ってくださったことで、私たちにとって身近な自然や事象のあり方や仕組みが段々と明らかになってきたのを感じました。



▲活発な質疑応答がなされました

【避難訓練】 2016年2月5日(金)

「ブナセンターで避難訓練と救急救命を行いました。」



▲心肺蘇生の訓練

ブナセンターでは定期的に避難訓練を行っています。今回は、避難訓練と併せて救急救命を行いました。スタッフも自動車免許取得の際に受けた講習以来なので、昔の記憶を辿りながら消防員の指導を受けました。いざという時に対応できるようにこれからも定期的に行っていきます。

【新しい展示品の追加】「只見町で見られるアリの標本」

ユネスコエコパーク事業として行っている研究助成で調査された茨城大学の北出理氏らが只見町で採集したアリの標本を展示しています。

【連載：世界のBR (Biosphere Reserves: 生物圏保存地域) No.7】

ユネスコエコパークというのは日本国内の呼び名で、国際的には生物圏保存地域 (Biosphere Reserve: BR) といいます。現在、120カ国に651のBRがあります。ここでは、海外のBRをシリーズで紹介します。2014年6月に只見町や南アルプスと同時に海外では11の地域がBRに登録されました。前回に引き続きそのうち1つのBRを紹介します。

Brighton and Lewes Downs(イギリスのブライトンとレイスダウン)

ブリテン島の南東部の海岸に位置する3万9000ヘクタールにおよぶBRです。ブライトンの町と南ダウン国立公園の一部を含み、37万人の人口を擁します。この地域の地質の特徴は石灰岩でできていることです。東側の海岸は印象的な石灰岩の岸壁が卓越していて、西側は都市化した平坦な海岸が見られます。この地域では、国際的にも保護が必要



とされる200種以上の野生生物が生息し、数千種におよぶ地域的に希少な種が存在します。希少種の生息地の多様性と遺産的な価値が高いことやロンドンから近いことからツーリズムがさかんで、年間1200万人が訪れます。観光以外には、農業や商業用の海洋漁業が盛んです。

*この記事は以下のユネスコのホームページに基づいています。このホームページから各BRの写真を見ることができます。もちろん、只見も載っています！

<http://www.unesco.org/new/en/media-services/multimedia/photos/mab-2014/>

【新刊発行のお知らせ】 「只見町ブナセンター紀要 No.4」



<もくじ>

[巻頭言]自然保護における調査研究(科学的データ)の重要性／朱宮丈晴

只見町に生息するタダミハコネサンショウウオについて／吉川夏彦

クロジクツクバネウツギの形態的特徴と分布／加藤英寿・加藤朗子

ヒメサユリ(*Lilium rubellum*)の個体群は3年間ではどのように変化したのか

／大曾根陽子・菊地 賢・渡部和子・河原崎里子

あがりこ型樹形のコナラ林の林分構造とその形成過程／鈴木和次郎・菊地 賢

福島県只見町の遷移後期段階にあるブナ林の群集組成と林分構造／鈴木和次郎・中野陽介

自然条件下におけるブナ立木の荷重による幹変形(ひずみ)の測定／宮下彩奈・南野亮子・館野正樹

只見町のアリ相-2014年の採集調査による記録-／北出理・諸岡歩希・岡野拓真・浦山光太郎

「季節とともに生きる只見の野鳥とその生態」 (企画展解説シリーズ No.8)



本書では、只見町で見られる野鳥を季節という視点を通して紹介します。只見町は、山林原野が町の総面積の94%を占める豊かな自然を持ちますが、反面、平地でも2mから3mに及ぶ積雪がみられる過酷な環境にあります。鳥類の多くは、夏の間だけこの豊かな自然環境を利用して去っていきます。その一方で、過酷な只見町の冬を乗り越えて生きる鳥もいます。季節を行きかう野鳥の姿を紹介する本書が、只見町の自然を理解し、楽しむ一助となれば幸いです。

(※只見町ブナセンターでともに¥500で販売しています。)

【編集後記】今年度最後のブナセンターだよりの編集をしているとこの1年間いろいろなことがあったことを思い出します。気づいたら懐かしくなって今年度のブナセンターだよりのバックナンバーを探して読んでいました。

発行 只見町ブナセンター 〒968-0421 福島県南会津郡只見町大字只見字町下 2590 番地

開館時間：午前9時～午後5時（最終受付は午後4時まで）

休館日：火曜日（祝祭日の場合は翌平日）

入館料：高校生以上300円 小中学生200円 未就学児無料（20人以上は団体割引）

電話 0241(72)8355 ホームページ <http://www.tadami-buna.jp>

FAX 0241(72)8356 電子メール info-buna@amail.plala.or.jp

